

オルダス・ハックスレー 「クローム・イエロー」(翻訳③)

桑 原 加代子

第11章

バーベキュー・スミス氏は帰って行った。車は風を切って彼を連れ去った。かすかなガソリンの臭いが、彼がたった今帰ったことを示していた。かなりの人が彼を見送りに前庭までやって来ていた。そして今、一同は屋敷の横を廻ってテラスや庭の方へと戻っていくところだった。皆黙って歩いていた。誰も、今帰ったばかりの客について批評しようとはしなかった。

「どう？」と、やっとアンがもの問いたげに眉をあげてデニスに言った。「どう？」誰かが話を始めてもいい頃だ。

デニスはその誘いを断った。スコーガン氏に譲った。「どうですか？」とデニスは言った。

スコーガン氏は答えず、ただ「どうです？」とその質問を繰り返したただけだった。

発言はヘンリー・ウィンブッシュに残された。「週末の楽しい添えものでしたね」と彼は言った。その声は死亡記事のようだった。

一同はどこに行くともなく、テラスの横の急ないちいの木の散歩道を通ってプールの方へと降りて行った。屋敷は彼らの頭上高く聳え、70フィートのレンガ造りの正面に、築きあげたテラスの高さが加わって、非常に高かった。三つの塔の真っすぐな線が何物にも邪魔されず聳え、その高さの印象を一層高め圧倒されるようだった。皆はプールの端に立ち止まり後ろを振り返った。

「この屋敷を建てた人は、自分のすべきことをちゃんと心得ていたんですね」とデニスと言った。「建築家だったんですね。」

「そうでしょうか？」とヘンリー・ウィンブッシュは思惑ありげに言った。「私はそうは思いません。この屋敷を建てたファーディナンド・ラピス卿という人は、エリザベス朝に栄えた人です。父親からこの屋敷を譲られ、その父親は修道院の解体の時にこれを賜ったんです。だからクロームは元々修道僧のための修道院で、このプールは養魚池だったので。ファーディナンド卿は、この古い修道院を自分の目的のために使うだけに満足せず、

納屋や牛舎や離れを建てるための採石場として使い、屋敷としては新しくレンガ造りの壮大なのを建てたのです——皆さんが今見ているのがそれです。」

彼は屋敷の方を指さし、そして黙った。クローム屋敷は厳格に堂々とそしてほとんど威嚇するかのよう、彼らを見下していた。

「クロームの偉大なところは」とスコーガン氏が話の糸口を捉え、「間違いなく、積極的に芸術作品だということです。自然と妥協などしていない。むしろ自然を侮辱し挑戦している。シェリーの⁽¹⁾『魂の分身』の中の塔とは少しも似ていない。もし記憶に誤りがなければ——

『もはや人間技には見えず
巨人のごとく
大地の中央にその形をとり
山より、自然石より生まれ
明るく高き大空に聳える』

いや違う。クローム屋敷にはこんなたわごとなどない。百姓のあばら家が彼らのものである大地から生まれたように見えるのは、確かに正しいし相応しい。しかし、知的で文化的で洗練された人の家は土から生まれたように見えるべきではない。土の生活とは完全に、そして不自然に無縁であることを示すべきだ。ウィリアム・モリスの時代からずっと我々イギリス人には理解できない事実だった。文化的で洗練された人々が、真面目な顔をして百姓ごっこをしている。そこから奇妙なもの、美術工芸、百姓家まがいの建物などが生まれた。郊外には、百姓家を奇妙に真似たり応用したりした家が際限なく並んでいる。貧しさと無知、そして限られた材料が百姓家を生んだんだ。あれは、適当な環境におけば、それはそれで『巨人のごとく』魅力を持っている。今日我々は富と技術と豊富な材料を使って、全く不適当な環境に何百万という百姓家まがいのものを作っている。愚かさもここまでくれば大したものだね？」

ヘンリー・ウィンブッシュは、中断された話の糸をとりあげた。「君のいうことは、スコーガン君」と彼は言い始めた。「その通りだ。しかし、ファーディナンド卿がこの屋敷を建てた時に君と同じ意見だったのか、あるいは建築に関して意見を持っていたかどうか、私は怪しいと思っているんだよ。この屋敷を建てる時に、ファーディナンド卿はたった一つの考えに心を奪われていたんだ——つまり、厠をどこにするかということだ。衛生設備が彼の一生で最大の関心事だった。1573年にこれについて一冊の本を出版しているくらいなんだ。もっとも今ではほとんど手に入らないが。『枢密顧問官勲爵士 F. L. 著、厠の設計』というタイトルで、かなりの知識を披露しこの問題が上品に扱われている。一つの家での

衛生設備の場所を決める彼の基本原則は、厠を下水設備からできるだけ遠くに設けるということだった。そこで、厠は当然屋敷の一番上に作られ、垂直の軸で地下の穴や管と繋がれることになった。もっともファーディナンド卿がただ物理的かつ衛生的なことだけでこうしたとは考えるべきではない。というのは、厠をこんな高い所におくということには、すばらしい精神的理由があったのだ。『厠の設計』の第三章の中で、彼は自然の諸欲求は非常に低俗で動物的であるため、それに従っていると我々は自分が宇宙の最も高貴なものであることを忘れがちになると語っている。この墮落的な影響に逆うためには、厠はなるべく天に近いところにし、雄大な眺めのとれる窓をつけ、さらに厠の壁には本棚を置き『ソロモンの箴言』⁽³⁾、ボエシウスの『哲学の慰め』⁽⁴⁾、エピクテータス⁽⁵⁾、マルクス・アウレリウス⁽⁶⁾の格言集、エラスムスの『手引き書』⁽⁷⁾といった人智の粋を集めた本、さらには、人間の魂の高貴さを証明する古今東西の所産を並べるべきだと言っている。クローム屋敷ではこの考えを実行することができた。三本の塔の天辺にそれぞれ厠を作った。ここから一本の軸がこの屋敷の全長、つまり70フィートの高さを降りて地下室に届き、築きあげたテラスの一番下と同じ高さの地面の中にうめ込まれ、水を流す下水管の中へ入っている。この下水管は養魚池から数百ヤード下の川に通じている。塔の一番上から地下の下水管までの軸の全長は102フィートあった。18世紀には、近代化のためにこれらの記念すべき衛生設備は壊されてしまった。言い伝えや、ファーディナンド卿による正確な説明書がなければ、こういった厠がかつてあったことすら我々は知らなかっただろう。また、ファーディナンド卿がこの屋敷をこういった風変わりな形で、すばらしい形にしたのは単に美的理由だと考えたかもしれない。

過去の様々な栄光を考えると、ヘンリー・ウィンブッシュの心の中にはいつも熱い情熱が沸き上るのだった。灰色の山高帽の下顔は、話を進めるにつれて紅潮していった。今はない厠の思いが彼を深く感動させた。話を終えた。すると顔の輝きは次第になくなり、頭をおおっている真面目で礼儀正しい帽子そのものの顔になった。長い沈黙があった。優しく憂鬱な思いがそれぞれの人々の心を捉えていたようだった。永遠、はかなさ——ファーディナンド卿と厠はもうない、クローム屋敷は今だにここに存在している。太陽は何と明るく輝き、死は何と不可避なものか！神の御業は不思議だ、しかし、人間の業はさらに不思議だ…

「気持ちがすっきりするね」とスコーガン氏がやっと言った。「こういった現実離れたイギリス貴族の話の聞くと。厠について一つの理論を持ち、それを実行するために立派で壮大な屋敷を建てるなんて、本当にすばらしい、見事だ！こういうのは好きだね。風変わりな貴族たちが大きな馬車に乗って、途方もない用事のためにヨーロッパを渡り歩く。オペラ歌手、ラ・ビアンキの喉を買いにベニスまで行く。もちろん、そんなもの彼女が死なないと手に入りはしない。しかしそんなことはどうでもいい。待っているんだ。有名なオ

ペラ歌手の喉をコレクションとして集めているんだ。また、有名な音楽家の楽器にも熱中している。パガニーニ⁽⁸⁾を買収してグアルネリ⁽⁹⁾の作った小さなバイオリンを手に入れようとしている。しかし成功の望みはまずない。パガニーニはバイオリンを絶対に手離さない。しかしギター一本くらいならくれるかもしれない。また、十字軍に従軍し野蛮なギリシア人の中で悲惨な最期を遂げたり、白いシルクハットをかぶってイタリア人を先導して圧迫者に立ち向かうものもある。あるいは全く仕事もせず、その奇行を大陸の風に当てている連中もいる。本国では自由気儘に入念にその奇行を育てている。ベックフォード⁽¹⁰⁾は塔を建て、ポートランド公⁽¹¹⁾は地面に穴を掘り、百万長者のキャベンディッシュ⁽¹²⁾は馬小屋に住んで羊肉しか食べず、50年間の電気に関する様々な発見の先取りをして一人で楽しんでた。これらは全て個人的喜びのためだった。見事な奇人たちだ！どの時代もこういった人々の存在によって生き生きとしてくる。いつか、デニス、君は…」とスコーガン氏は彼の方に小さく丸くよく光る目を向けて言った——「いつか君は彼らの伝記を書かなければいけないよ——『奇人たちの一生』いいテーマだろう。僕が自分で書きたいくらいだ。」

スコーガン氏はもう一度、高く聳えている塔を見上げ、二、三度「奇行」とつぶやいた。「奇行…これは貴族たちを正当化するものだ。有閑階級、世襲財産、特権、天賦の才、その他の不公平さ全てを正当化してしまう。この世の中で理にかなったことをしたいと思えば、世論の攻撃も受けず、貧困の心配もなく、安定して自由で暇もあって『正業』という名の日常の馬鹿々々しい仕事などしなくてもいい階級の人間が必要なんだ。限界ぎりぎりでもしたいことのできる階級が必要だ。奇行にふけり、その奇行が黙認され理解される階級が必要だ。貴族にとって大切なのはこのことだ。奇行であるだけでなく——時には壮大ともいうくらい奇妙な場合もあるが——他の階級の奇行も黙認し奨励さえる。芸術家や新奇を追い求める思想家の奇行も、一般の人々なら本能的に感じる恐怖、嫌悪感、反感を彼らは感じない。貧乏白人⁽¹³⁾——その上渡り者の中に作られたアメリカンインディアンの保護地帯のようなものだ。その中で野蛮人がはしゃぎ回っている——いささか下品で風変わりではあるが。そしてこの枠の外で同じような精神を持って生まれたものは、野蛮で常規を逸したものに対して良き市民らしく、貧乏白人たちからの非難場所となる。社会革命が起きれば保護地帯はなくなるだろう。アメリカンインディアンたちは、貧乏白人たちの海⁽¹⁴⁾の中で溺れ死ぬだろう。そうしたらどうなるか？彼ら白人たちは依然として君にピラネル⁽¹⁴⁾を書き続けさせてくれるだろうか、デニス？ヘンリー、君もこのすばらしい屋敷に住んで空しい知識の鉱山を静かに掘り続けることが許されるだろうか？アン、君だって…」

「あなたは」とアンがさえ切って言った。「そうやって話し続けていられるかしら？」

「安心して下さい」とスコーガン氏は言った。「許されません、『正業』につくでしょうから。」

第12章

「⁽¹⁵⁾ 胴枯れ病、うどん粉病、黒穂病…」メアリーは訳がわからなくなって困ってしまった。聞き間違えたのかもしれない。多分。本当は、デニス⁽¹⁶⁾は「スクワイアー、⁽¹⁷⁾ ビニョン、⁽¹⁸⁾ シャンクス」とか、「⁽¹⁹⁾ チャイルド、⁽²⁰⁾ ブランデン、⁽²¹⁾ アーブ」だとか、「⁽²²⁾ アバクロンビー、⁽²³⁾ ドリンクウォーター、⁽²⁴⁾ タゴール」と言ったのかもしれない。でも、あの時は聞き間違えてはいなかった。「胴枯れ病、うどん粉病、黒穂病」だった。その印象ははっきりしていて、忘れられない。「胴枯れ病、うどん粉病…」と彼女は、デニスが本当にあの時、ありそうもない言葉を口にしたのだと結論づけようとした。彼女が真面目な論議をするのを彼はわざと避けようとしたのだ。不快だ。女だからという理由だけで女と真面目に話をしたくないというような男は——我慢できない!⁽²⁵⁾ エゲリアか、そうでなければ、それ以外の人物では駄目なのか。ゴンボールドの方がずっといい。フランス南部の特徴はちょっと不安だが、少なくとも真面目に仕事はしているし、彼女と一緒にできるのは彼の仕事の方だ。ではデニスは何体デニスは何なのか? 所詮はアマチュア、素人…。

ゴンボールドは、空地の向こうの緑の小径にある現在使われていない倉庫を仕事部屋として勝手に使っていた。四角いレンガ造りの建物で、屋根は尖っていて小さな窓が壁の上⁽²⁶⁾にいくつかあった。ドアには四段のはしごがついていた。というのは、その倉庫はネズミが来れないように地面より高い位置にあり、灰色の石の上にはえている四本の巨大な毒きのこの上に建てられていたからである。中には、埃とクモの巣の臭いがかすかに漂っていた。小さな窓から常時射し込む細い一筋の光の回りには、銀色のほこりが集まっていた。ゴンボールドは、ここで毎日六、七時間、猛烈な集中力で仕事をしていた。彼は、捉えることができればの話だが、何か新しいもの、何かものすごいものを追い求めていた。

この八年間の内のほとんど半分は、このこととの戦いだった。立体主義⁽²⁶⁾の彼方を目指し、今は立体主義から卒業していた。形式化された自然を描くことから始め、それから徐々に自然から純粋な形の世界へと入り、ついに人間の心があみ出す、抽象的で幾何学的な形の中に表われる自分自身の考えだけを描くに至ったのだった。この過程は骨の折れるそして刺激的なものだと気付いた。それから突然、面白くなり耐えられないくらい狭い限界の中に置かれていると感じた。自分の作り出した形は何とわずかで未熟でつまらないものかと、恥ずかしくなった。自然の産み出すものは数限りなくあり、想像もできないくらい微妙で精巧なものだ。彼は立体主義をやめた。卒業してしまった。しかし立体主義の修養のお蔭で、過度に自然を崇拜するということはなかった。彼がとり入れたのは自然の豊かで微妙で精巧な形であったが、いつも目的としていたのは、その形を感動的な単純性と形式⁽²⁷⁾を持つ全体へと作ることだった。カラバッジョの優れた作品の記憶が心に浮かんだ。暗

闇の中から表われる生き生きとした形が、数学的観念と同じくらい単一で単純ではっきりとした構図を作りあげていた。「十字架にかけられたペテロ」、「リュートを弾く人」、「マグダラのマリア」のことを思い出した。カラバッチョ、あの恐るべき奴には秘密があったのだ！今ゴンボールドはそれを一生懸命追い求めていた。そうだ、もし捉えることができれば、ものすごいことだろう。

長い間、彼の頭の中には一つの考えがあった。数多くのスケッチをし下絵を描き、それからその考えをキャンバスに移した。一人の男が馬から落ちている。絵の上半分はこのやせた白い馬の巨大な体で占められていた。うつむいているその頭は影になっていて、やせた馬の体が目立っている。二本の足はアーチのように絵の両側にある。塔のように聳えている足間の地面には、頭を極端に手前におき、体を歪め両腕を左右に大きく広げた男が倒れていた。白く非情な光が右側の前景のある一点から注がれている。馬と倒れた男だけに光が当たり、その回りも向こう側も後ろも全て真っ暗だった。あるのは馬と人間だけだった。馬の体が絵の上半分を占めていた。両側には馬の二本の足と大きなひずめがあった。その下に男が倒れており、歪んだ男の顔に焦点がおかれていた。左右の腕は絵の両側に大きく広げられていた。弓なりになった馬の腹の下、両足の間で男の目は暗闇を見つめていた。光の当たった二つの姿と暗闇…。

絵は半分以上出来上っていた。ゴンボールドは午前中ずっと男の姿を描き続けていた。そして今、一休みしてたばこに火をつけたところだった。ほとんど壁に触れるくらい椅子を後ろに傾けて、キャンバスをじっと見つめていた。満足している半面がっかりもしていた。絵自体は悪くない。しかし彼の追い求めているもの、もし捉えることができればものすごいものになるはずのものを、彼は手に入れたのだろうか？これから先その見込みがあるのだろうか？

三回ドアをたたく音がした——トン、トン、トン！びっくりしてゴンボールドはドアの方を振り向いた。今まで仕事で邪魔をしたものはいなかった。いわば不文律のようなものだった。「はい！」と彼は叫んだ。少し開いていたドアが勢いよく開き、メアリーの姿が現われた。はしごの半分まで登ってきていた。彼が駄目だといえば、ここにいる方が引き返すのには楽だし体裁も悪くない。

「入ってもいいかしら？」と彼女は尋ねた。

「どうぞ。」

彼女は残りの二段を飛びこえて入口のところにやって来た。「二回目の郵便でお手紙が来ていました」と彼女は言った。「大切なものではないかと思って持って来たのですが。」手紙を渡す時の彼女の顔はきらきら輝いていた。見え透いた口実ではなかった。

ゴンボールドは封筒に目をやり、そのままポケットにしまった。「あいにく」と彼は言った。「大切なものではありません。でもどうもありがとう。」

沈黙があり、メアリーは少し意心地が悪くなった。「絵を見せていただけませんか？」と勇気を出して言った。

ゴンボールドはまだ半分しかたばこを吸っていなかった。一本吸い終わるまでは仕事を再開する気はなかった。「ここから見るのが一番いいですよ」と彼は言った。

メアリーは、しばらく黙って絵を見ていた。実際何と言っていいかわからなかった。びっくりして途方にくれていた。立体主義の作品を期待していた。それなのに目の前にあるのは人間と馬の絵、一目でそれとわかるどころか、あまりにも正確に描かれてさえある。馬の下に倒れて、歪んだ人物の絵を言い表わすには、『だまし絵⁽²⁸⁾』という表現以外には他に言葉がなかった。どう考えどう言えばいいのか？ 順応性はなくなってしまった。昔の巨匠たちの再現主義なら誉めることもできる。はっきりと。しかし、現代画家においては…？ 18才の時ならできただろう。しかし立派な判断力を養う5年間の教育を受けたあとでは、現代作品の再現主義に対する彼女の本能的な反応は軽蔑だった——軽蔑を込めて大笑いすることだった。ゴンボールドは何をしようとしているのか？ 以前に彼の作品を誉めていればよかったと思った。しかし、今はどう言っていいのかわからなかった。あまりにもむづかしいことだった。

「どちらかといえば明暗法かしら⁽³⁰⁾」とやっと言った。そして、穏やかでその上鋭い批評の言葉を見つけられて内心喜んでいた。

「そうです」とゴンボールドは同意した。

メアリーは嬉しかった。ゴンボールドは彼女の批評を受け入れてくれた。真面目な議論だ。彼女は頭をかしげ目を細めた。「とてもすばらしいと思います」と彼女は言った。「でも私には少し…だまし絵…」彼女はゴンボールドの方を見た。彼は返事もせずたばこを吸いながら考え深そうに絵をじっと眺めていた。息苦しそうにメアリーは続けた。「この春、パリにいた時、ソプラスキーの作品をたくさん見ました。とてもすばらしいものでした。もちろん抽象的です——ものすごく抽象的でものすごく知的で。二つか三つの長方形をキャンバスに描いて——御存知でしょう、そして基本的な色を塗るんです。でもデザインはすばらしいものです。日毎に抽象的になっていって、私がパリにいる間に三次元の世界をやめて、今二次元の世界をやめることを考えているんです。これからは真っ白なキャンバスになるだろうと言っています。論理的結論です。完璧な抽象化。彼の絵は終わりがけています。純粋な抽象化に到達すれば、今度は建築に移るつもりです。建築の方が絵より知的だと彼は言っています。そうは思いませんか？」と彼女はもう一度尋ねた。

ゴンボールドは、たばこを落として足で踏みつけた。「ソプラスキーは絵をやめ」と彼は言った。「僕はたばこを吸い終わった。でも僕は絵を描き続ける。」そう言って彼女の方にやって来て、肩に腕をまわし絵から離し、自分の方に向かせた。

メアリーは彼を見上げた。黄金の鈴のような髪が揺れた。彼女の目は穏やかに微笑んで

いた。その時が来た。彼の腕はメアリーを抱きしめていた。彼はゆっくりと歩き彼女も一緒に歩いた。歩きながらの抱擁だった。「私の言うことわかってくれます？」と彼女は繰り返した。その時が来るかもしれない。しかし知的で生真面目であることをやめることはできなかった。

「わかりません、考えてみましょう。」ゴンボールドは抱擁の手を緩め、肩から手を離れた。「はしごを降りる時は気をつけて」と彼は心配そうに付け加えた。

メアリーはびっくりして振り向いた。二人は開けたままのドアのところにいた。彼女はしばらく困った様子でそこに立っていた。肩におかれていた腕は背中の下の方にあり、三、四回優しくたたかれた。彼女はそれに、機械的に応えて一歩前を出た。

「はしごには気をつけなさい」とゴンボールドがもう一度言った。

彼女は慎重だった。後手にドアを閉め、緑の小径に出た。ゆっくりと農場の方へと戻って行った。物思いに沈んでいた。

第13章

ヘンリー・ウィンブッシュは、夕食の時、厚紙の紙ばさみで簡単にとじた一束の印刷した書類を持ってきた。

「今日は」と彼は厳かな調子でそれを見せながら言った。「今日、『クロームの歴史』の印刷が終わりました。今夜最後のページの活字を組む手伝いをしたんです。」

「あの有名な『歴史』ですか？」とアンが叫んだ。この大仕事の著述と印刷は、思い出せないくらい前から続いていた。ヘンリー伯父の『歴史』は彼女の子供の頃から、漠然と伝説めいていて話に聞いたことはあったが、見たことはなかった。

「ほとんど30年近くかかった」とウィンブッシュ氏は言った。「書くのに25年、印刷に4年。そして今日、完成した——ファーディナンド・ラピス卿の誕生から私の父のウィリアム・ウィンブッシュの死までの全記録——3世紀半以上にもわたるものだ。クローム屋敷で書かれクロームの私の印刷所で印刷されたクロームの歴史だ。」

「完成したのなら読ませてもらえますか？」とデニスが尋ねた。

ウィンブッシュ氏はうなずいた。「もちろんです」と彼は言った。「面白くなくはないですよ」と謙遜してつけ加えた。「この屋敷の記録保安室の、特に昔の記録はしっかりしているんだ。三又フォークの導入についても明らかにできそうなんだ。」

「人間の方はどうなんですか？」とゴンボールドが尋ねた。「ファーディナンド卿やその他の人々は——面白い人たちだったんですか？犯罪や悲劇的なことはないんですか？」

「えーと」とヘンリー・ウィンブッシュは考え深そうにあごをなでた。「自殺が二件、非業の死が一件、失恋事件が四、五件、身分違いの結婚や女を誘惑したり私生児が生まれた

りして家名が汚されたのが五、六件。全体としては静かで大した事件のない歴史だ。」

「ウィンブッシュ家もラピス家も冒険好きでない、上品ぶった人たちのよ」とプリシラが軽蔑したように言った。「もし今、私が私の家の歴史を書くとしたら！始めから終わりまで家名を汚すものばかりでしょうね」と彼女は楽しそうに笑いワインをもう一杯飲んだ。

「もし私が私の家の歴史を書くとしたら」とスコーガン氏が言った。「存在しないだろうね。スコーガン一族は、二代目以降古代の霧の中に消えているんだから。」

「夕食の後で」とヘンリー・ウィンブッシュは、クロームの今までの当主たちに対するプリシラの軽蔑したような言葉に少し腹を立てて言った。「歴史の中から一つエピソードを読んでみましょう。そうすれば、ラピス家にだって上品は上品なりに、悲劇が存在し冒険談があったということがわかるでしょう。」

「聞きたいものだわ」とプリシラが言った。

「何が聞きたいの？」とジェニーが、鳩時計の鳩が突然飛び出してくるように、自分だけの世界から出て来て尋ねた。説明を聞くと、にっこり笑い、うなずき、「なるほど」と言って元の世界に戻りドアを閉めてしまった。

夕食が終わり、一同は応接間に場所を移した。

「さて」とヘンリー・ウィンブッシュがランプの方へ椅子を引き寄せて言った。べっこの鼻めがねをかけ、簡単にとじただけで、まだバラバラのページを注意深く、めくり始めた。読むところを見つけ、「いいですか？」と顔をあげた。

「どうぞ」とプリシラはあくびをしながら言った。皆が黙っている中、ウィンブッシュ氏は一つ軽くせき払いをして読み始めた。

「1740年、ラピス家四代目の準男爵になる運命を持った子供が生まれた。とても小さな赤ん坊で生まれた時は3ポンドに満たなかったが、元気で健康だった。母方の祖父で主教だったハーキュリーズ・オッカム卿に敬意を表して、ハーキュリーズと名付けられた。彼の母親は多くの母親がするように、ノートに彼の毎月の成長を記録した。10か月で歩き、2才になるまでに言葉を話すようになった。3才の時の体重は24ポンドしかなく6才の時には読み書きは完全に出来、音楽の才能もすばらしいものだったが、体の方は2才の子供よりも小さかった。この間に母親は男の子と女の子を一人ずつ生んだが、一人は偽膜性喉頭炎で赤ん坊の時に死に、もう一人は5才になる前に天然痘で亡くなってしまった。ハーキュリーズだけが唯一の子供となった。」

「12才の誕生日の時にはハーキュリーズの身長はわずか3フィート2インチしかなかった。頭の形はとてもよく品もよかったが、体の割には大きすぎた。しかしその他の点では非常に均整がとれていて、体の割には力もあり敏速だった。両親は何とかして彼を大きくしようと当時の有能な医者にご相談し、様々な処方文字通り行ってみたが無駄だった。ある医者はたくさん肉を食べるように勧め、別の医者は運動を勧めた。またある医者は、異

教徒糾問所で使われたものをモデルにした小さな拷問台を作り、その上にハーキュリーズをのせて朝晩30分づつ非常な苦痛を与えて身体を引っ張った。次の三年間でハーキュリーズは身長が2インチ伸びたが、その後彼の成長は完全にとまり、一生3フィート4インチのこびとの域を出なかった。息子に大きな期待をかけ、マールバロ公⁽³¹⁾のような軍人になって欲しいと思っていた父は大いに落胆した。『この世に奇形児を送った』といつも言い、激しい嫌悪感を示したので、息子は父の前にはほとんど姿を現わさなかった。穏やかだった性格も、失望で気むづかしくなり乱暴になった。世間との交際を避け(造化の戯れの父である自分が、普通の健康な人々の中にいるのは恥ずかしいのと言っていた)一人で酒に浸り、そのため早死してしまった。ハーキュリーズが成人する前に父は脳溢血で亡くなった。父の嫌悪が増すにつれ愛情をますます注いでくれた母も長くは生きていなかった。夫の死後一年足らずで、2ダースの牡蠣を食べて腸チフスで死んでしまった。」

「こうしてハーキュリーズは21才の時に孤児となり、クロームの地所と屋敷を含むかなりの財産の所有者となった。子供時代の美しさと知性は大人になっても失われず、こびとの身長でさえなければ当代一の美しく洗練された若者になっていただろう。英語、フランス語、イタリア語で書かれた多少とも価値のある近代作家の作品だけでなく、ギリシア、ラテンの作家の作品もよく読んでいた。音楽の才能もあり、バイオリンも上手で、バイオリンを弾く時にはコントラバスを弾くように両足の間にバイオリンをおいて椅子に坐って弾いていた。ハーブシコードやクラビコードの音楽は特に好きだったが、手が小さすぎるため演奏することはできなかった。小さな象牙の笛を作らせ、気分が落ち込んだ時は素朴な田舎風の曲やジグ舞曲⁽³²⁾を演奏していた。こういった曲の方が巨匠たちの芸術作品より気持ちを元気にさせると考えていたためである。幼い頃から詩作の修養をかさね、かなりの力を発揮すると自分では思っていたが出版したことはなかった。『私の身長が私の詩に反映している。もし世の中の人々が私の詩を読むとしたら、それは私が詩人であるからではなく、こびとであるからだ』と彼はよく言っていた。ハーキュリーズ卿の詩の原稿が少し残っている。その一遍は彼の詩人としての才能を十分示している。

『古代、世界がまだ若く、
 アブラハム⁽³³⁾が羊を飼い、ホーマー⁽³⁴⁾が詩を作る以前、
 鍛冶屋のトバル⁽³⁵⁾は創造の火を飼い慣らし、
 ヤバル⁽³⁶⁾は天幕に住にユバル⁽³⁷⁾が豎琴を奏でていた頃、
 腐敗した肉体は怪物を生み
 醜悪な巨人が怯える大地を踏みつけ
 やがて神は罪深き一族に耐えかね
 怒り、大洪水の中に彼らを沈めた。

⁽³⁸⁾
多産のテルスは再び子を宿し、
無骨な英雄と戦士を生み
逞しい肉体の上に無知な頭を乗せ
愚かで大胆で愚鈍。
時は流れ、人類は洗練され
力は弱く、しかし、知力は大きく
先祖の剣、弓、矛を嘲笑い、
ペンを使うことを覚えた。
キャンバスと文字が
彼の名を不滅のものとし
その名は栄誉の殿堂の壁を飾る、
人類が小さくなるにつれ芸術が大きくなったがために
このように人類の長い進歩を辿ると
巨人が死に英雄があとに続く、
墮落した巨人、愚かな英雄、
一方に我々は打ち震え、他方を嘲笑う。
最後に人間が現われる。その精神の
清らかな光は、節度をわきまえた肉体の中で燃える。
古代、英雄が戦い巨人が群がっていた頃
人間は精神のない巨大な塊で、
その巨大な塊を支配するのに疲れ
精神は眠り、頭の中は空虚だった。
近ごろ、肉体が小さくなるにつれ、
精神は疲れることなく働き、
ファロスの灯台のように知性の光を放つ。
しかし神は向上するこの人間の
歩みを止めたいと思うだろうか？
知性、美において
巨人族より遥かに優れている人類を？
立ち去れ、不遜な考えよ！神の御手に
導かれ人類は約束の地に向かって進む。
いつか時は来るだろう（予言者のごとく私は遥か彼方の暗い空の向こうに、かすかな
光を認める）
黄金時代の幸せな人間が、

暗い歴史のページを逆にめくり
現在の自慢の人類の中に
巨人や古代の戦士たちのような
無骨な肉体と死んだ冷たい頭脳を見る時が。
やがてその時が来て、魂は
不必要な物質から解き放たれ
軽い肉体は子鹿のように敏速に
ピロードの芝の上を優雅に走り回るだろう。
自然の最も繊細で最後の子である
完全な人類が地球を所有するだろう。
しかし その時はまだだ！いまだに
小さくなったとはいえ巨人が、美しい大地を
踏みしめ、粗野で不快で自尊心の強い
不完全な人間が大声で誇っている。
肉体の大きさを誇り、その名残りを残している
巨人の醜悪さを誇り
小さいものに対しては軽蔑し
自らを神の子と思っている。
嘆かわしいこの運命
高貴な種族の数少ない先駆者たちの運命！
人間の輝かしい栄光を予言するために生まれながら
天を目指すその生活は地獄の生活。』

財産を相続するとすぐ、ハーキュリーズ卿は一家の改造を始めた。というのは、その奇形を恥じていた訳ではないが——上の引用した詩からもわかるように、彼は自分の方が多くの点において普通の人間より優れていると考えていた——普通の男や女の存在を煩わしいと考えていたからである。世の中においての野心は全て捨てなければならないと考え、世の中から身を退き、全てが自分の体に合う自分だけの世界をクロームに造ろうと決心した。従って、昔の召使いたちは解雇し適当な後任が見つかり次第、こびとの召使いに代えていった。二、三年の内に彼の回りにはたくさんの召使いが集まり、4フィートを越えるものは一人もなく、一番小さいものは2フィート6インチだった。父の代のセッター⁽⁴⁰⁾、マスティフ⁽⁴¹⁾、グレイハウンド⁽⁴²⁾、ビーグル犬⁽⁴³⁾を家には大きすぎ乱暴だという理由で売ったり、人にやったりした。そして、その代わりに狎やキング・チャールズ・スパニエル⁽⁴⁴⁾やその他の小さな種類のものを飼った。父の時の馬も売ってしまった。自分用に乗馬用、馬車用と

して黒のシェトランド・ポニー⁽⁴⁵⁾ 6頭と白黒斑のニューフォレスト⁽⁴⁶⁾産の子馬を飼った。

このように満足いくように、すっかりやりかえてしまうと、あとに残ったのはこの楽園と一緒に住む配偶者を見つけることだった。ハーキュリーズ卿は、多感な心の持ち主で16才から20才の間に一度ならず恋心を抱いたことがあった。しかし、ここで彼の奇形が最もつらい屈辱感の根源となった。というのは、かつて選んだ相手に自分の気持ちを打ち明けるところ、一笑に付されてしまったことがあったからである。しつこく繰り返すと、その女性はうるさい子供にするように彼をつまみ上げ振り回し、あっちに行け、これ以上困らせないでと言った。この話はすぐに広まり——事実この女性はことあるごとに面白いエピソードとして話していた——痛烈な皮肉と嘲りがハーキュリーズをひどく悩ますことになった。この頃書かれた詩から、彼が死のうと考えていたと推察できる。しかし時が経つにつれて屈辱感は薄らいでいったが、これ以後はどんなに激しい恋をしても二度と自分の気持ちを打ち明けることはしなかった。財産を相続し思い通りに自分の世界を造れる立場になって以来、もし妻を持つのであれば——とても欲しいと思ったし、情の細やかな恋多き性質だったので——召使いを選んだ時と同じように、今後はこびとの中から選ぶべきだと思った。しかし相応しい妻を見つけるのは困難だった。というのは、美しく生まれのよい人とでなければ結婚したくなかったからである。ベンボウロ卿のこびとの娘については小さいという理由の上にせむしだということで断った。またハンプシャー家の孤児の女性は、顔がこびとによくあるようにしわくちゃで醜いということで断った。とうとうほとんど成功を絶望視していた時、信頼すべき筋からベニスの貴族ティティマロ伯爵のところに、身長3フィートの非常に美しく教養のある娘がいることを知った。すぐにベニスに向かい、貧民地区の一画のみずぼらしい家に妻と五人の娘と住んでいた伯爵に会った。事実、伯爵の生活は貧窮していて、丁度、道化のこびとの役者を失ったばかりの旅回りの一座に、そのこびとの娘フィロメナを売る交渉をしていたところだった。ハーキュリーズ卿は彼女をこの不幸な運命から救うのに間に合った。彼はフィロメナの優雅さと美しさに心を奪われ三日間の交際で結婚を申し込み、父親はこのイギリス人の義理の息子の財力と確かな収入源を認め、父娘共々それを受け入れた。イギリス大使が証人として出席するという地味な結婚式をあげ、ハーキュリーズ卿と花嫁は海路イギリスに戻り、穏やかで幸せな生活に落ち着くことになった。」

「クロームとこびとばかりの世界は、フィロメナを喜ばせた。彼女はこの時始めて、親切な世界で自分と同じ立場の人たちと自由に生きていけると感じた。夫とは特に音楽においては共通の趣味を持っていた。美しい声でとても力強く、楽に中高音のイの音を出すことができた。夫の弾くクレモナ製⁽⁴⁷⁾のバイオリンに合わせて、生まれ故郷のオペラやカンタータ⁽⁴⁸⁾の楽しく、優しい歌を唱うのだった。ハーブシコードの前に坐り、普通の人の手のために作られた音楽を二人は四本の手で弾くことができ、このことはハーキュリーズ卿を非常

に喜ばせた。」

「英語やイタリア語の本を読んだり音楽を楽しんだりしない時には、戸外で健康的なスポーツ、例えば湖にボートを浮かべたり、馬に乗ったりドライブをしたりしていた。こういったものはフィロメナにとっては全く初めての経験だったので、大喜びだった。彼女が上手に馬に乗れるようになると、二人は今よりずっと広かった狩園に狩りに出かけた。彼らはキツネや野ウサギではなく飼ウサギを追い、食物を与えられていない30頭の黒や栗毛色の狝が小型の犬に負けなくらいウサギを追いかけ回した。真紅の洋服を着て、白いエクスマ⁽⁴⁹⁾産の小馬に乗った四人のこびとの馬丁が獵犬を追いたて、主人夫妻は緑の服を着て黒のシェトランドか黒白班のニューフォレスト産の小馬に乗って後を追った。この狩りの様子は、犬、馬、馬丁、二人も含めて、ウィリアム・スタップスが絵に描いている。ハーキュリーズ卿は、彼の作品を高く評価し普通の背の人間だったが絵を描かせるために、屋敷に招待していた。スタップスは、ハーキュリーズ卿夫妻が四頭の黒いシェトランド産の馬の引く緑のエナメル¹の馬車に乗っている絵を描いた。ハーキュリーズ卿はピンクのベルベットの上着に白の半ズボン、フィロメナは花柄のモスリンにピンクの羽のついた大きな帽子をかぶっている。華やかな馬車に乗った二人の姿は、黒い木々を背景にくっきりと浮き出ているが、絵の左側は木もまばらで、だんだんなくなり四頭の黒い小馬は太陽の光に輝く金褐色の雷雲の空を背景にしている。」

「こうして四年間が幸せの内に過ぎた。四年目の終わりにフィロメナに子供ができた。ハーキュリーズ卿は非常に喜んだ。『神がもし全能なら、ラピス家の名を不朽のものとし、我々稀少で繊細な種族は、幾世代をも通じて伝わり、現在嘲笑られているものたちの優秀さを世界が認める時が、いつかは来るであろう』と日記に記した。妻が男の子を生んだ時、同じような詩を書いた。子供はこの屋敷の建設者を記念してファーディナンドと名付けられた。」

「数か月が過ぎ、ある種の不安が二人の心に芽ばえ始めた。というのは、子供が異常な速さで成長したのである。1才の時、ハーキュリーズが3才の時と同じ体重となった。『ファーディナンドは次第にその速度を早める』とフィロメナは日記に書いた。『普通とは思えない』。18か月にして屋敷の中で一番小さい36才の騎手と同じ背になった。ファーディナンドは巨大な大きさの普通の人間になる運命なのだろうか？二人ともこのことについては口に出そうとしなかったが、それぞれ日記には恐れと困惑した調子で記していた。」

「3才の誕生日には、ファーディナンドは母よりも背が高く父よりもわずか2インチ低いだけだった。『今日、始めて我々はこのことについて話し合った。恐るべき真実はもはや隠してはおけない。ファーディナンドは我々の仲間ではない。本来ならその健康と美しさを祝うはずの3才の誕生日に、我々二人は、我々の幸せが破壊されることに涙した。神よ、この試練に耐える力をお与え下さい』とハーキュリーズ卿は日記に書いている。」

「8才になったファーディナンドは非常に大きく、並みはずれて健康だった。そのため両親は気が進まなかったが学校に入れることにした。次の学期の始めにイートンに送り出された。深い平穏が一家に訪れた。夏休みには以前よりもっと大きく、逞しくなったファーディナンドが帰って来た。ある日ファーディナンドは執事をなぐり倒し腕を折った。『彼は乱暴で思いやりがなく言うことをきかない』と父は書いた。『行儀を教えるには体罰しかない』。この時ファーディナンドは父よりも17インチも背が高く体罰など受けることはなかった。』

「三年後の夏休み、ファーディナンドはとても大きなマスティフ犬を連れてクローム屋敷に戻って来た。あまりにも食費がかさむというので、ウィンザー⁽⁵⁰⁾のある老人が手離したものだ。乱暴で信頼できない犬だった。屋敷の中に入るやハーキュリーズ卿お気に入りの狎を一匹つかまえて、口にくわえ振り回して殺しかけた。このことにひどく腹を立てて、ハーキュリーズ卿は馬小屋に繋いでおくよう命じた。ファーディナンドはふくれて、これは自分の犬で自分の好きところで飼いたいと答えた。父はさらに怒って、すぐに屋敷からその犬を出すよう命じた。ファーディナンドは拒否した。丁度その時母が部屋の中に入って来て、犬はあつという間に彼女に飛びかかり、押し倒し腕と肩に咬みついた。もしハーキュリーズ卿が剣を抜き犬の心臓に突き刺さなかったら、間違いなく喉をかききられていたに違いない。父は息子に向かって母親を殺そうとした人間が彼女と同じ部屋にいる資格はない、すぐに部屋を出ていけと命じた。大きな犬の死体に片足をおき、まだ血のついている剣を手にして立っているハーキュリーズ卿の姿は、あまりにも恐ろしく、その命令する口調と顔付きは断固としていたので、ファーディナンドは怖くなって部屋を出て、その夏は模範的に過ごした。母の傷は間もなく癒えたが、心に受けた傷は根深く、それ以後いつも恐怖を感じるようになった。

ファーディナンドがヨーロッパ旅行⁽⁵¹⁾をしていた二年間、両親にとっては幸せで平穏な時だった。しかしその時でも将来の不安が頭から離れなかったし、昔の遊びで気を紛わすこともできなかった。フィロメナ夫人は歌を唱うことができず、ハーキュリーズ卿はリューマチのためバイオリンを弾くことができなかった。彼は狎を連れて乗馬をすることはあったが、妻の方は年をとり例のマスティフ犬の一件以来、神経質になっていてできなかった。夫を喜ばせるため彼女にできることは、シェトランド産の最も安全で年老いた馬の引く馬車に乗って遠くからお供をすることだった。』

「ファーディナンドの帰国の日になった。フィロメナは漠然とした恐怖と予感を感じ、自室に引きこもった。ハーキュリーズ卿一人が息子を出迎えた。茶色の旅行着を着た巨人が部屋の中に入って来た。『おかえり』とハーキュリーズ卿は少し震える声で言った。」

『「お元気そうですね』とファーディナンドは体をかがめて握手をした。それからまた、体を伸ばした。父の頭の先が息子のおしりの高さだった。』

「ファーディナンドは一人で帰って来たのではなかった。同じ年頃の友人二人と一緒に、それぞれが召使いを連れていた。この30年間、これだけの数の普通の大きさの人間で、神聖なクローム屋敷が汚されたことはなかった。ハーキュリーズ卿は胆をつぶし腹を立てたが、客をもてなす掟には従わなければならなかった。彼は若者たちを丁重に迎え、召使いを台所にやり十分世話をするように命じた。」

「昔の食卓が出され、埃を払われた(ハーキュリーズ夫妻はいつも高さ20インチの小さなテーブルで食事をしていた)。年老いた執事サイモンはその大きなテーブルの端からやっと顔を出せるだけで、ファーディナンドと客が連れて来た三人の召使いに手伝ってもらって夕食の給仕をした。」

「ハーキュリーズ卿は、主人役を勤めいつものように優雅に外国旅行の楽しみ、外国で出会う芸術や自然の美しさ、ベニスのオペラやベニスの教会での孤児たちの合唱などの話をした。若者たちは、特に彼の話に耳を傾けもせず、執事が必死になって皿を取り代えたりグラスに酒をつぐのを見ていた。彼らは激しくせきこんだり息をとめたりして、大笑いを抑えていた。ハーキュリーズ卿は気づかないふりをしていたが、話題をスポーツに変えた。これに対して若者の一人が、狽を使ってウサギ狩りをするのは本当かと尋ねた。ハーキュリーズ卿はそうだと答え、詳しく説明し始めた。若者たちは大笑いした。」

「夕食が終わると、ハーキュリーズ卿は椅子から降り、妻がどうしているか見にかねばと言っておやすみを言って出て行った。大笑いの声が彼の後を追った。フィロメナは眠ってはいなかった。ベッドに横になって、大笑いする声や階段や廊下に響く重い足音を聞いていた。ハーキュリーズ卿は彼女のベッドサイドに椅子を持って来て、妻の手を握りながら長い間じっと黙って坐っていた。10時頃二人は激しい物音にびっくりした。グラスの壊れる音、足を踏み鳴らす音、叫び声と大笑い。騒々しさは数分間続いた。ハーキュリーズ卿は妻がとめるのも聞かず立ち上り、何が起きたのか見に行こうとした。階段には明りがなかったので、ハーキュリーズ卿は手探りで階段を一段降りる毎に踏み板の上に立ち止まり、それからまた一歩足を踏み出して降りて行った。騒ぎは下の方が激しかった。叫び声は意味のわかる言葉になった。食堂のドアの下から一筋の光がもれていた。ハーキュリーズ卿はつま先立ちで広間を横切った。ドアに近づいた途端に、また恐ろしいばかりのグラスの割れる音と、金属ががちゃがちゃ鳴る音がした。何をしているのか？つま先立ちで鍵穴からのぞいた。めちゃくちゃになったテーブルの真中で、体のバランスがとれないくらい酔っぱらった執事のサイモンが、ジグダンスをしていた。足で壊れたグラスを踏みつけ、靴はこぼれた酒で濡れていた。三人の若者はテーブルをかこみ手をたたいたり、空のワインの壺でテーブルをたたいて叫んだり、大笑いしていた。壁にもたれていた三人の召使いも笑っていた。ファーディナンドが突然、踊っている執事にクルミを投げつけた。彼はびっくりして、ぼーとしてよろめきひっくり返り、デカンタやグラスを壊してしまった。彼ら

は彼をだき起こし、ブランデーを飲ませ背中をたたいた。老人はにっこり笑ってしゃっくりをした。『明日は、』とファーディナンドが言った、『家中でバレエをしよう』。『お父さんのハーキュリーズには棒を持たせてライオンの皮をかぶせよう』と友人の一人が言うと、三人ともどっと笑いこぼれた。」

「ハーキュリーズ卿はこれ以上見るのも聞くのもやめた。広間を横切り、やっとの思いで一段づつ階段を上って行った。終わりだ。この世にはもう彼のいる場所はなかった。ファーディナンドと彼が共にいる場所はなかった。」

「妻はまだ起きていた。もの問いたげな様子に彼は答えた。『年寄りのサイモンをからかっている。明日は我々の番だ』。二人はしばらく黙っていた。」

「とうとうフィロメナが言った。『明日という日を見たくないわ。』」

「『その方がいい』と、ハーキュリーズ卿は言った。自分の部屋に行き、日記にその日の出来事を詳しく書いた。日記を書いている間、召使いを呼んで11時に風呂に入る準備をするよう言いつけた。日記を書き終わると、妻の部屋に行き、彼女が眠れない時にいつも飲む量の20倍の阿片を一服作り、『睡眠薬だよ』と言って渡した。」

「フィロメナはそのコップを受け取り、しばらく横になっていたがすぐには飲まなかった。目には涙が浮かんでいた。『夏にテラスに腰かけて二人で唱った歌、覚えていらっしゃるか？』そう言って彼女はストラデラの⁽⁵²⁾『愛よ愛よ、眠るなかれ』の二、三小節をかすれた声で唱い始めた。『それにあなたはバイオリンをお弾きになりましたね。ついこの間のよう。でももう昔のことね。さようなら、あなた。また会える時まで』彼女は薬を飲み干し枕に頭を置き目を閉じた。ハーキュリーズ卿は彼女の手にはキスをし、彼女を起こさないようそっとつま先立ちで部屋を出た。部屋に戻り妻の自分への最後の言葉を記し、指示通りに準備してあった湯を浴槽の中に入れた。湯は熱すぎてすぐには入れなかったので、本棚からステーニアスの本を取り出した。⁽⁵³⁾セネカの⁽⁵⁴⁾死の様子を読みたいと思った。パラパラとめくってみた。『しかし彼は、こびとを自然の戯れ、不吉の前兆として嫌った』彼はなぐられたように立ちつくした。このアウグスタス⁽⁵⁵⁾という男は、ステントールの⁽⁵⁶⁾ような声を持ち身長2フィート、体重17ポンドのルシアスという名門の青年を、円形競技場で見世物にしたのだった。彼はページを繰った。ティベリウス⁽⁵⁷⁾、カリブラ⁽⁵⁸⁾、クラウディウス⁽⁵⁹⁾、ネロ⁽⁶⁰⁾。ますます恐ろしい物語だった。『彼は師セネカに自殺を強制した』ペトロニウス⁽⁶¹⁾が登場する。彼は最期の時に、友人たちを呼び、切り開かれた血管から生命が引いていく間に、哲学の慰めではなく恋愛や情事の話させた。インクつばにペンを浸し、彼は日記の最後のページに書いた。『ローマ人の如く死んでいった』。それから片足を湯の中に入れ熱くないことを確かめると、ガウンを脱ぎ手に剃刀を持ち、浴槽の中に坐った。左手の動脈を深く切り、横になり瞑想にふけた。血が流れ出て、環や螺旋になって水面に浮かんでいった。しばらくして浴槽全体がピンク色になった。色が濃くなりハーキュリーズ卿はどうするこ

ともできない睡魔を感じた。夢から夢へと沈んでいった。まもなく熟睡した。彼の小さな体にはそれほど多くの血はなかった。」

第14章

昼食後のコーヒーを飲むため、一同はいつものように図書室に席を移した。窓は東向きで、今の時間はここが屋敷の中で一番涼しい場所だった。大きな部屋で、18世紀中に作られた優雅なデザインの白い棚がついていた。見せかけの本が本物らしく並んでいる一方の壁の真中にあるドアを通ると、幅の広い戸棚があり、そこにはたくさんの手紙や古新聞の山に混じって、二代目ファーディナンド卿がヨーロッパ旅行から持ち帰ったエジプト人のミイラの棺がひっそりと置かれていた。10ヤード離れたところからちらりと見ただけでは、このドアは本物の本がたくさん詰った本棚の続きとしか見えなかった。手にコーヒーカップを持ったスコーガン氏が、その偽物の本棚の前に立っていた。コーヒーをちびりちびり飲みながら話を始めた。

「一番下の棚には14巻の百科辞典がある。役には立つが、『フィンランド語辞典』同様、少々退屈だ。『人名辞典』の方がよく見える。『偉人伝』、『偉大な事を成し遂げた人々』、『彼らに影響を与えた偉人たち』、『普通の人たち』。それから、『トムの業績と放浪』全10巻、『見果てぬ夢』、無名の作家による6巻足らずの『ある物語』。しかし、おやこれは何だろう？」スコーガン氏は、つま先立ちでのぞき込んだ。「『ノックスポッチの話』全7巻。『ノックスポッチの話』」と彼は繰り返した。「ヘンリー」と彼の方を振り向いて言った。「君の持っている中で、これが一番いいね。この本のためなら残りの本全部を売ってもいいくらいだ。」

初版本を数多く持っているウインブッシュ氏は嬉しそうに微笑んだ。

「本の背表紙とタイトルだけを持つこともできるね？」とスコーガン氏は続けた。戸棚を開け、他にも本がありそうだと思って中をのぞき込んだ。「ちえ」と言ってドアをパタンと閉めた。「埃とかびの臭いがする。象徴的だ。びっくりするようなものを期待して、過去の傑作を手にし、開けてみると暗闇と朽ちた臭いしかない。一体、飲酒、好色、我が儘と言った悪徳以外の何を読もうとするのか？我々は自分の心を満足させるために本を読む。何よりも物を考えないために本を読む。しかし——『ノックスポッチの話』…。」

彼は言葉を切り、考え深そうにこの架空の手に入る事のない本の背表紙を指でたいた。

「でも、あなたの読書についての考えには賛成できませんわ。真面目な読書という意味ですけど」とメアリーが言った。

「そうです、メアリー、その通りです。この部屋に真面目な人がいるのを忘れていました」とスコーガン氏が答えた。

「僕は、伝記というものが好きです」とデニスが言った。「理解できるので。」

「ええ、伝記は立派です。伝記はすばらしいものです」とスコーガン氏は同意した。「伝記は上品で19世紀風のスタイルで書かれていると思います——言葉によるブライトンの展⁽⁶²⁾示館のようなものです。」スコーガン氏は手をあげ、間違っただけという風に手をおろした。「ヘレネー⁽⁶³⁾についての伝記を読んで御覧なさい。白鳥に姿をかえたジェピター⁽⁶⁴⁾がどんな風にしてレダ⁽⁶⁵⁾に対して『その地位を利用した』か読んで下さい。神々についての伝記を書いているということを見ると！何という仕事だ、ヘンリー！君のこの馬鹿々々しい配置のお蔭で読めやしないじゃないか。」

「私は『見果てぬ夢』の方が好きだわ」とアンが言った。「6巻の小説——この方が落ち着くわ。」

「落ち着く」とスコーガン氏は繰り返した。「その通りだ。『見果てぬ夢』は健全だ。しかし、少し時代遅れだ。50年代の牧師の生活、典型的な上流階級の間人、百姓たちの悲哀と喜劇、そして、背景にはいつも自然の美しさが穏やかな調子で描かれている。何もかもしっかりしていていいのだが、少々退屈だ。個人的には『トム⁽⁶⁶⁾の業績と放浪』の方が好きだなあ。風変わりなトム氏。仲間はトムトム爺さんと呼んでいる。彼は10年間をチベットで過ごし、ヨーロッパ航路のバター産業に従事していた。そして一財産作って36才で事業から引退することができた。残りの人生を旅行と推理小説に費やし、これがその成果です。」そう言ってスコーガン氏は見せかけの本をトントンと叩いた。「さあ、今度は『ノックスポッチの話』です。何とすばらしい本だ、何とすばらしい人物だ！ノックスポッチは小説の書き方を知っていた。デニス、もし君がこのノックスポッチの本を読めば、若者の精神の成長などというつまらないものや、チェルシー⁽⁶⁷⁾、ブルームズベリー⁽⁶⁸⁾、ハムステッド⁽⁶⁹⁾といった文化的なところでの生活についてのどうでもいいような細々としたことは、永久に書けなくなりますよ。読まれる本を書くようにしなさい。しかし、ああ！この本の並べ方のお蔭でノックスポッチも読めやしない。」

「僕以上にその事実を悔やんでいる人間はいませんよ」とデニスは言った。

「ノックスポッチだ」と、スコーガン氏が続けた。「我々を写実小説の重圧から解放してくれたのは偉大なノックスポッチだ。ノックスポッチはこう言っている、『私の人生は、中流階級の内実について読んだり書いたりするのに時間をさくほど長くはない』と。さらにこうも言っている、『社会にどっぷりつかっている人間を見るのは飽き飽きした。自由に楽しく空間に絵を描きたい。』」

「ノックスポッチは理解しにくいと思うのですが」とゴンボールドが言った。

「そうです」とスコーガン氏が答えた。「彼は目的を持っていたんです。実際より深いように見せていました。しかし、彼が暗く曖昧なのはその格言の中だけです。物語の中でははっきりしています。そうだ、あの物語！何とすばらしい。どうやって説明したらいいか。」

現実離れした人物が派手な服を着て、ブランコに乗っている芸人のように、本のページの中を軽快に飛んで行く。並みはずれた冒険と並みはずれた思索がある。知性も感情も、文明生活のあらゆる馬鹿げた偏見から解き放たれて、あっちに行ったり、こっちに来たり、進んだり後戻りしたり、突き当たったりしながら、複雑微妙なダンスをしながら動く。果てしない知識と空想が手に手をとって歩き回る。現在と過去のあらゆる主題について、あらゆる思想がこの作品の中にひょいと現われ、厳かに微笑んだり、その思想の諷刺にしかめつらをしたりして、何か新しいものに場所を明け渡して消えていく。彼の作品の表面に現われる言葉は、豊かで様々に変化する。ウィットはひっきりなしに現われている…」

「しかし例をあげることはできないでしょう」とデニス⁽⁶⁹⁾が口をはさんだ。「具体的な例を。」

「ああ！」とスコーガン氏が答えた。「ノックスポッチの偉大な本はエクスカリバーの剣のようなものです。このドアにしっかりと突きささっていて、才能を持った作家が現われて作品を書いてくれるのを待っているのです。私は作家ではないし、こんな仕事をする資格もありません。この木製の牢獄からノックスポッチを引っ張り出すことは、デニス、君にまかせますよ。」

「それはどうも」とデニスは言った。

(注)

テキストは、Aldous Huxley, *Crome Yellow* (Harmondsworth, Penguin Books, 1974) を使用。

- (1) Shelley : Percy Bysshe Shelley (1792~1822)、英国の叙情詩人。 *Prometheus Unbound* (1820)、 *Ode to the West Wind* (1819)。
- (2) William Morris : 英国の詩人、工芸美術家 (1834~96)。
- (3) *Proverbs of Solomon* : 『ソロモンの箴言』 Solomonは紀元前10世紀のイスラエルの王で Davidの子。賢人として有名。
- (4) Boëthius : Anicius Manlius Severinus (475?~525)、ローマの哲学者、政治家。 *The Consolation of Philosophy*。
- (5) Epictetus : ギリシアのストア派の哲学者 (60~120?)。
- (6) Marcus Aurelius : ローマ皇帝 (121~180)。ストア派哲学者、著述家。
- (7) Erasmus : Desiderius Erasmus (1466~1536)、オランダの人文主義者。文芸復興運動の先覚者。 *The Praise of Folly* (1509)。
- (8) Paganini : Nicolò Paganini (1782~1840)。イタリアのバイオリニスト、作曲家。
- (9) Guarnerio : Giuseppe Antonio Guarnerio (1698~1744)、イタリアCremonaのバイオリン製作者。
- (10) Beckford : William Beckford (1760~1844)、英国の著述家。“Fonthill” と呼ばれたゴシック式の高さ260フィートの塔のある邸に引籠り、世間と没交渉の趣味生活を送った。
- (11) Portland : Duke of Portland
- (12) Cavendish : Henry Cavendish (1731~1810)、英国の物理学者、化学者。
- (13) Poor White : (軽蔑的に) 特に米国南部、南アフリカの無知で金、財産もなく、社会的身分の低い白人。貧乏白人、劣等白人。

- (14) villanell: ビラネル。19行 2 韻体の詩形。通例 5 つの 3 行連句で書かれ、最後に 4 行連句が続き全部が 2 つの韻に基づいている。本来イタリアの民謡に由来するフランスの詩型。英詩では 19 世紀以後用いられている。
- (15) Blight (胴枯れ病)、Mildew (うどん粉病)、Smut (黒穂病)。これは、“What are the three disease of wheat?”に対する答えであるが、実際Maryが、Denisに尋ねたのは“Which contemporary writer do you like?”というものであった。
- (16) Squire: Sir John Collings(1884~1954)、英国のジャーナリスト、詩人。*Author of Imaginary Speeches* (1912)。
- (17) Binyon: Lawrence Binyon (1869~1943)、英国の詩人、翻訳家、美術史家。大英博物館東洋部長。1929年来日。*Landscape in English Art and Poetry* (1930)。
- (18) Shanks: Edward Richard Buxton (1892~1953)、英国の詩人、批評家。
- (19) Childe: Vere Gordon (1892~1957)、オーストラリア生まれの英国の人類学者、考古学者。*What Happened in History* (1942)。
- (20) Blunden: Edmund Charles Blunden (1896~1974)、英国の詩人、批評家。東京帝国大学講師 (1924~27)。*Undertones of War* (1928)。
- (21) Earp: Wyatt Earp (1848~1929)、米国西部の保安官。
- (22) Abercrombie: Lascelles Abercrombie(1881~1938)、英国の詩人、批評家、劇作家。*Interlude and Poems* (1908)。
- (23) Drinkwater: John Drinkwater(1882~1937)、英国の詩人、劇作家、批評家。*Abraham Lincoln* (戯曲) (1918)。
- (24) Tagore: Rabindranath Tagore(1861~1941)、インドのBengali語による詩人。1913年Nobel文学賞。『ギーターンジャリ』(1912)。
- (25) Egeria: (ローマ神話) ローマ第 2 代の王ヌマポンピリウス王に宗教上の指導をしたと言われるニンフ。王の祭儀と政治上の相談役。
- (26) Cubism: 立体主義、キュービズム。20世紀初頭に起こった芸術運動。自然の再現的描写から脱し、対象を分析し画面に再構成する。Picasso、Grisによって始められ、現代芸術に大きな影響を与えた。物体の構成の強調、自然の形態の幾何学的形態への置きかえが特徴。
- (27) Caravaggio: Michelangelo Caravaggio (1573~1609)、イタリアバロックの代表的画家。
- (28) trompe - l'oeil: たまし絵。実物と見まごうほどの精密で迫真的な描写。
- (29) representationalism: 再現主義。対象をそれとわかるように描写する技法。特に対象の外面的特性を目に映る通りに描写する主義、技法。
- (30) chiaroscuro: キアロスкуро、明暗法。他の色を用いないでただ明暗を主とした画法。
- (31) Marlborough: Ist Duke of Marlborough (1650~1722)、英国の将軍。スペイン継承戦争中、Blenheimの会戦でフランスのルイ14世の軍に大勝。
- (32) jig: ジグ舞曲。急速度で軽快な 6 分の 8 拍子のダンス。16~17世紀英国で流行。
- (33) Abram: Abraham。古代ヘブライ民族の始祖。
- (34) Homer: 紀元前10世紀頃のギリシアの詩人。*Iliad, Odyssey*。
- (35) Tubal: Tubal - cain。刃物を鍛える者の祖先。
- (36) Jabal: LamechとAdahの子、遊牧民の祖。
- (37) Jubul: Jabalの弟。音楽の父、楽器製作者の祖とされる。
- (38) Telles: (ローマ神話) 大地の女神、結婚と豊産を司る。
- (39) Pharos: エジプト北部Alexandriaの小半島。古くは湾内の小島。紀元前 3 世紀、ここに大理石の灯台が建てられた。
- (40) setter: English setter。英国で作り出された鳥猟犬種のイヌ。
- (41) mastiff: 大型で短毛の番犬用犬種のイヌ。

- (42) greyhound : 野ウサギ狩りに使われる体高のある足の速い猟犬種のイヌ。
- (43) beagle : 肢の短い耳の垂れた小型猟犬種のイヌ。徒歩でする野ウサギ狩りに使われる。
- (44) King Charles spaniel : これを愛玩した英国王CharlesIIにちなむ、小型犬種のイヌ。
- (45) Shetland pony : Shetland諸島原産の、高さが肩で3フィート内外の毛が荒らく、極めて頑丈な一品種の小馬。
- (46) New Forest : イングランド南部Hampshire州にある森林で国立公園。1079年Williem the Conqueorの命で造られた。
- (47) Cremona : イタリア北部Po川に臨む古都。16~18世紀においてはバイオリン製造で有名。
- (48) cantata : 17世紀イタリア起源の音楽形式。独唱者による叙唱、詠唱を中心とする。多楽章から成り重唱や合唱もこれに加わることがある。
- (49) Exmoor : イングランドSomerset州北部とDevon川北部にわたる高原地方。
- (50) Windsor : イングランド南部Berkshire州東部の都市。Thames川に臨みWilliam the Conqueor以来、歴代の王宮があった。
- (51) Grand Tour : 昔、英国で上流階級の子弟にその教育の仕上げとして行わせた、ヨーロッパ大陸巡遊旅行。
- (52) Stradella : Alessandro Stradella (1645~82?)、イタリアの作曲家。
- (53) Suetonius : ローマの伝記作家 (69?~140?)。
- (54) Seneca : Lucius Annaeus (4 B. C. ?~A. D. 65)、ローマのストア派の哲学者、悲劇作家。
- (55) Augustus : ローマ最初の皇帝 (27 B. C. ~A. D. 14)。シーザーの後継者、国政を改革し学芸を奨励した。
- (56) Stentor : *Iliad*に登場する大声の布告人。50人に匹敵する声を持っていたと言われている。
- (57) Tiberius : ローマ第2代皇帝 (42 B. C. ~A. D. 37)。
- (58) Caligula : ローマ皇帝 (12~41)。暴虐無道で知られる。
- (59) Claudius : ローマ皇帝 (10 B. C. ~A. D. 54)。
- (60) Nero : ローマ皇帝 (37~68)。残虐、淫蕩で暴君。
- (61) Petronius : (?~66)、Neroの廷臣。
- (62) Brighton : イングランド南東部、East Sussex州の都市。イギリス海峡に臨む英国最大の海水浴場。
- (63) Helen : (ギリシア神話) ZeusとLedaを父母とする絶世の美女で、スパルタ王Menelausの妻。トロイのParisに連れ去られたことからトロイ戦争が起きた。
- (64) Jupiter : ギリシア神話のZeusにあたる。神々の王で天の支配者である最高の神。
- (65) Leda : (ギリシア神話) Zeusが白鳥の姿で言い寄って妻とした女性。Helenの母。
- (66) Chelsea : London南西部Thames川の北岸にある住宅地。18世紀には磁器を生産、古く画家、文人が多く住んだので有名。
- (67) Bloomsbury : Thames川とCharing Crossの北にあるLondonの一地区。ロンドン大学や大英博物館などのある住宅地域で、そこには多くの著名な芸術家、作家などが住み文教地区として知られている。
- (68) Hamstead : London北西部の旧自治区。丘の多い地域で住宅地。
- (69) Excalibur : アーサー王の魔法の剣。